

## 自己PRするイエス

(ヨハネ八・一二―三〇)

ある方のブログに「自己PRは自分の自慢話ではない」という一文を見つけた。「能力の有無を判断するのは本人ではなく、周囲だ」とも。なるほど「俺ってさー、結構いいやつなんだけど」、「ワタシ、努力の人だから」と言うのをいきなり聞かされれば確かに「イタイ」と感じるのは私だけではない。口では「ふーん、そうなんだー。」と合わせてみてもその言葉を聞いたものの腹の中では「そうかなあ」「言ってるっ」はては「三味線ひいてんじやないよ、ゴルア(怒)」ということになっていくことがままある。

閑話休題。今朝の箇所の冒頭、あの有名な「私は世の光である」はまさにイエスの自己PR。私たちはキリスト教が世界宗教になってから、多くのクリスチャンの証とともにこの言葉を聞くのでさほど違和感を持たないがガリラヤの田舎出の青年教師と目されていたナザレのイエスが最初にこれをそう言った時、聞く人々の反応はやはり「なぜおまえが？」となったのは不思議ではなかった。以下パリサイ人、ユダヤ人の二つの反応を観察し、それを深めてみたい。

### 一・「拒絶」―パリサイ人たち

前回話した通り、主要な写本は七・五三〇八・一一を欠いているので、そこを飛ばせば、この「私は世の光です」を語られたのは仮庵の祭り、都エルサレムの恐らくは宮の中のことと考えられる。イエスはそこで自らが世の光であること、そして自らに従う(―)者はいのちを得ることを明瞭に証された。これに対して聞いた者たちはどう反応しただろうか。答えは「拒絶」。しかも真っ向からの「拒否」であった。パリサイ人たちの反証のポイントは明瞭だ。それは「自分の事を自分で証言しているから」というものである。他の人に証明してもらうならまだしも、「自分で言っちゃだめでしょ」というわけだ。だがイエスはそれをねのける。イエスの反論の論点は二つ。第一にイエスは自らがどこから来てどこへ行くのかを知っている。つまり過去から未来のすべてを知っている存在、即ち神であるから自己証言で構わないという主張であり、第二にはよし律法に照らして二名の証人が必要だということとであつても、御父なる神がもう一人の証人になるのだから何ら問題はないということであつた。イエスのこのロジックは、しかしパリサイ人の理解をはるかに超えていた。目の前にいる、どう見ても普通の身なりの男が自らをいのちの与え手なる光と名乗り、神を父と呼ぶ。

### 二・「無理解と不信」―ユダヤ人たち

これはパリサイ人達にとつては冒瀆であり、受け入れられないことであつた。ここでイエスと対話をしているのは「ユダヤ人」たちだが、彼らはイエスの事を全く理解してはいなかった。しかし「事実は小説よりも奇なり」。彼らはなんとイエスが自殺でもするのかとも言った。ある聖書学者がいうように、皮肉にもこれはある意味においては正しい理解である。なぜならイエスは私たちの罪の代価を支払うために御父のご計画に従い十字架につかれたからである。だがこの時点でこういったことが彼らにわかつていたわけでは当然ない。またユダヤ人たちはイエスに「あなたはだれですか」と問うた。しかしイエスが語っていたことを彼らはその時点で悟ることはできなかった(二七節)。ちなみにこれは単なる無理解では済まない。というのもイエスは「もしあなたがたがわたしのことを信じなければ、あなたがたは自分の罪の中で死ぬのです(二四節)」と喝破しているからである。ここでの「罪」ということは単数形であり、ヨハネ文書の中では罪行一般を指すのではなく、御子に対する不信仰と拒絶を指すという。私たちはここにヨハネ一・九〇―一の成就を見るのである。イエスはユダヤ人としてご自分の国に来たのに、彼らの

多くはイエスを真の意味で知ることはなかった。しかしそれもまた御旨にかなつたことであつた。なぜならイエスがパリサイ人たちやユダヤの指導者たちから拒絶されなければ、彼の十字架への道は閉ざされてしまふからである。

\* \* \*

オリンピックもいよいよ最終盤。クリスチャン・アスリートの活躍も光っている。その一人が陸上四百米走で世界新記録を出したW・ファンニーケルクだ。ちなみに前世界記録保持者はあのマイケル・ジョンソン。四〇〇米走五六連勝記録を持つレジエンドだ。かのレジエンドの記録をファンニーケルクはなんと第八レーンから更新した。五輪史上初めてメダリスト三人が四三秒台というハイレベルなレース。その中でのおつちぎりの快走だ。何と二位に六米の大差をつけたのだ。あのボルトも、そして伝説のレジエンド自身もニューヒーローの出現に目を細めたという。しかし彼が勝つたその日、彼のツイッターに挙げられた写真には何と JESUS DID IT の文字。コメント欄には GOD IS POWER (神は力) とあつた。キリストにある真の勝者は勝つて驕らず、神に栄光を帰すことを忘れない。イエスは世の光、そして彼に従う者もまたイエスの光となって世を照らす。君も、僕も、みんなそうだ。一隅を照らそう。